危機否認の質問は主として民政黨より提起せられて居る。議會外に於ても若槻同黨總裁が昨秋より一九三五、六年の危機を否認し來れることは周知の事實であつて、過般同氏が齋藤自相と會見後「露米に對しても適當なる外交工作さへ行へば危機は避け得る」此意味に於て危機はないと云ふことに兩者の意見一致した」と發表して、先づ軍部の主張せる危機說の根據を轉覆し、更に一月二十五日小川代議士をして「明年度豫算案は國防第一主義で、其結果軍需工業は勃興するも、農民が疲弊困憊に陷れば、軍部と其尻押しをして居る財閥に對し、怨嗟の聲を擧げないとも限らぬ」と述べさせ、又政友系に於ても二十四日靑木貴族院議員は「政府の豫算は軍部の爲めに作る豫算である。農相が如何に奮鬪努力しても糠に釘、農相は可哀さうだ」など〻反軍熱を煽つて居る。

要するに政黨は來るべき危機を否認し、軍部は此來らざる危機を口實として厖大なる軍事費を要求し、農民を塗炭の苦みに陷れんとするのだとの意味を、暗に國民に向つて宣傳しつ〻あるのである。吾人は徒に戰爭說を高唱して、內外の人心を不安に陷る〻が如き言論に左袒するものではないが、併しながら民政黨の言論は假にそれが眞であるとしても農民の怨嗟を軍部に向はしめ、所謂「軍民離間」の結果を招來するのみならず、折角緊張して臥薪嘗膽、以て來るべき危機に備へんとしつ〻ある國民精神を弛緩せしむる等、實に國家を害すること至大なるものと斷言する。況んや一九三五、六年頃に於て、我國が國際的重大危局に直面することは、吾人が既に屢々主張し、證明した所であり、外交技術の末節のみに依つて此危機を回避することは、絕對に不可能であり、軍備の充實と共に民力を涵養し、待つあるの國力に依つて、初めて危機回避の可能性を生ずることは、恐く軍部當局に於ても同感であらうと思はれる。故に軍部は斷じて農民を犧牲として軍備を充實せんとする樣な、利己的根性など持たないばかりか寧ろ荒木前陸相の如きは、率先して內政會議の開催を主張し、政黨出身閣僚の不熱心や反對を排除してまで、農村救濟策の確立に努力したではないか。之に依つても彼等の言論が如何に不眞面目であり如何に非國民的であるかの一端が窺はれやうと思ふ。

獨裁政治の排擊論

既成政黨は政權喪失以來、頻りに政黨政治の復活に焦慮し、其對策としてファッショ排擊の聲を高めて居る。現に政民兩黨總裁は、一月二十一日自黨大會の席上に於て、符節を合せた樣に「近時我國に於て、二、三の國のなす所に模倣し、國政を一部政治家の壟斷に委すべき獨斷政治に逆轉せしめんとする者あり、頻に策動を試みて居る」と演說し、一月二十四日衆議院に於て政友會の安藤氏は

五・一五事件以來、軍部が政治に干涉し、政治的陰謀でもあるかの如き疑惑を持ち、明日にでも新しい政治形態が生れるのではないかとさへ思つて居る

と述べ、越えて二十六日民政黨某議員は

現在の軍部一部に獨裁政治思想を抱く者なきか、在鄕軍人會の一部が或る種の政治的策動をした事實はないか

と問ふて居る。

吾人は既成政黨の腐敗墮落には見切りをつけて居るが、併しファッショ政治や、獨裁政治を謳歌するものでは